



國家圖書館 編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

172

國家圖書館出版社



国家出版基金项目
NATIONAL PUBLICATION FOUNDATION

國家圖書館編

東亞同文書院
中國調查手稿叢刊

172

國家圖書館出版社

第一七二冊目錄

昭和十五年（一九四〇）調查報告（第三十七期生）

我が興亞政策の在支發展狀況

我國興亞政策在華發展狀況 松坂賢 一

山西省教育復興狀況

山西省教育復興狀況 柴田武夫 七三

大同を中心とする晉北地方の交通

以大同爲中心的晉北地區交通 平田文次 一二三

山西省陽曲縣に於ける財政

山西省陽曲縣的財政 村井光三 一八七

昭和十五年度

我が興亞政策の在支發展狀況

山西省調査第一班
松坂賢

我が興亜政策の在支発展状況

山西省の實狀を見るに、目下山西省は北支四省中最も治安の悪い所であり、軍事行動の最前線とも云ふべき所である。戦争と建設工作とが有機的密切不可分の關係に立ってゐる現在に於て、政治、経済、文化の発展と云ふものは、軍事行動と歩調を合はせて進まねばならぬ事は言を待たぬ事ではあるが、現在燒眉の急とも云ふ可きものは此の軍事行動の完全遂行による省内抗日軍の掃蕩の撲滅である。

然しながら山西省の地勢よりして、急速なる軍事行動

の遂行が不可能なる事は、他者に比して不利なる点と云はねばならない。こうして不利なる点に原因して山西省の治安の確立はおくれ、それがひいては政治、経済、文化その他あらゆる方面の工業^作に影響してゐる事は争へぬ事実である。

然しながら山西省は次の様を好条件を具備してゐる。

(一) 閻錫山の親日的政治より来たる一般民衆の親日的気分

(二) 山西省は支那文化の停滞地である關係上、他の文化

通過地とに比し、人心が輕薄でない。

(三) 工場等の生産機構の破壊^壊がない。

(四) 農産、鉱産資源に富んでゐる。自給自足可能。

以上の諸点を考慮に入れる時、現状を以て、将来を悲観するに及ばない事を信ずる。

一、我が興亜政策の政治的發展

今政治的發展を見るにあたり、之を日本側の新發展と支那側の新發展とに分けて考察する事とする。

甲、日本側の新發展

(一) 特務機關の活動。前述しど如く、山西省の現状は

支戦線の最前線にある關係上、軍を以て政治工作は不可能である。したがって政治の最高指導体といふ

3. 可きものは軍特務機関である。此処から有指導系統は
 発せられてゐるわけである。軍に政治方面のみならず、
 経済、文化方面の指導、金融、物資の統制に於ても此の
 機関と没交渉のもうはありえないのである。又支那側の
 諸機関との密切なる連絡、指導、監督も行はれてゐる。
 例へば特務機関長が省公署の最高顧問を兼ね、別に補佐
 官があり、各廳にも各々一名の顧問を配置してゐる。更
 に縣、市公署には連絡員の名で日系の職員を入れて、特
 務機関との連絡、支那側の指導、監督にあたらせてゐる
 などとされている。斯くの如く日下特務機関の職務は、広

範圍で、あり、且つ重要な地位に置かれる。

從來軍は宣撫班なるものがあつて、軍の指示により、民衆宣撫を行つてゐたのであるが、昭和十五年三月十日を期して新民會と合流し、此処に宣撫班なる名稱は消滅し、新民會なる名稱に統一せられしわけである。

新民會は、その中心指導が日本にあるとしても、形式は支那側の機関である。こうして支那側の機関に統一せられしと云ふ事は、將來宣撫工作を行ふ上に於て、從來より多大の^成效果をあげうるものと考へられる。(未だ全済的方面おでの合流は行はれておらず)

次	に	報	道	陣	の	活	動	を	見	る	に	、	之	は	現	在	目	立	つ	た	活	動	は	
示	し	て	み	な	い	。現	在	の	活	動	は	軍	に	占	領	地	域	の	支	那	民	衆	に	
対	す	る	宣	傳	と	云	ふ	事	に	限	ら	れ	て	あ	る	。従	来	、	此	の	報	道	班	
は	軍	行	動	の	裏	面	を	行	く	も	の	で	、	之	に	は	、							
一、	軍	命	令	に	依	る	報	道	、															
二、	特	務	機	関	命	令	に	依	る	報	道	、												
三	支	那	側	機	関	利	用	に	依	る	報	道	、											
と	の	三	種	か	あ	り	、	一、	は	軍	の	命	令	に	よ	る	も	の	に	細	案	を	附	し
て	機	関	が	行	ふ	も	の	で	あ	り	、	二、	は	機	関	の	立	案	に	よ	る	も	の	で
あ	り	、	三、	は	支	那	側	の	機	関	省	、	縣	、	市	公	署	、	新	民	會	館	を	表

東亞同文書院學生調查大旅行指導室

面に於て、後方援助を軍が行ふものである。要するに、先述した如く、報道班の目覚ましい活動は現在には見られず、将来に期待するより外はない。

(二) 領事館の活動。元来領事館は南市場でなければ設置されないものであった。従つて南市場を有せぬ山西省として、領事館の設置は不可能であつた。事変前までは北京総領事館の管轄下にあつたが、事変と共に日本人の物凄い進出を見るに至り、監督、指導の見地よりして、山西省にも領事館の設置の必要が認められるに至つたのである。而して昭和十四年三月、遂に北京総領事館より独

立して、太原市に領事館の設置を見るに至った。
 領事館の職務として特筆すべきものはない。普通の
 領事館の如く、日本居留民の監督指導、保護にあたつて
 るるわけだ、保護の方面は主として軍が擔當してゐるか
 ら、取締の方面のみが、領事館の職務となつてゐる。そ
 の機関として、偷次、太原、陽泉、臨汾に警察分所を設
 置し、外務省警察官を派して各地の事務を取つてゐる。
 要するに山西省領事館の設置は、法的根拠があつたわけ
 けでなく、唯だ事實^際の要求によるものである。而してそ
 の職務は、従来憲兵隊が、軍特務機関の監督・指導に上

っで行つてゐるを、今度領事館が、外務大臣の命によ
 り、予地部隊の奥地に^徒井つて之を行つてゐるのである。
 目下領事館の目覚ましい政治的活動と云ふものは見られ
 ない。此の外居留民会の設置があり、居留民の種々の在
 話を行つてゐる。更に華北交通は、鉄路愛護村を設置し
 て、政治的活動をなしてゐるが、之は後で詳説すること
 とする。

乙、支那側の新発展

新中央政府が南京に成立するや、北支の臨時政府は、
 その特殊性に立脚して、^{華北}華北政務委員会と名を更め、王

克敏を中心として北京に樹立せられるに至った。
 而して今次事変の最高使命たる東亞新秩序の建設は、
 日滿支三国の密切なる提携を圖り、日本を中心とする東
 亞の安定を圖る中核を作る事であり、その為には各国各
 々自己の使命を自覚し、その使命達成の爲に相互の密切
 なる協同が要求せられるのは當然の事であり、各自の義
 務である。特に北支は事変発端の地であり、その重要特
 殊性より鑑みて、日本の將來に重大なる関係を有する事
 は今更贅言を要せぬ所である。
 現在、山西省の現状は、未だに軍事行動が行はれてゐ

る関係上、軍との密接なる関係をもって始めて始めて、支那側の活動が行はれてゐる事は当然の事であり、軍との関係を絶つこの活動と云ふものは、現在の所全く考へられな									
い状態にあかれてゐる。									
(一) 興亜政策に依る教育。									
人事変前の状況、山西省は他省に比し、教育は盛んで									
あり、その機関も整備してゐた所である。今左に事変前									
の学校名、学校数、学生数、教員数を示せば、									
学校名									
学校数									
学生生徒数									
教員数									
大学									
一									
七一〇									
七七									

学校名	学校数	学生生徒数	教員数
学院	一	八九	一一
専修学校	四	四八六	一一四
中学	五五	九九八九	七三五
師範	一七	一三二一	一五六
職業	六	二九八	五七
小学校	(二二一〇三)(一四七六五七七)(四九四〇四)		
其、他	四	二四二	四
(山西省二十四年度教育概況統計表)			
2. 事変後の状況。山西省の大都市は事変の戦禍を受け			

東亞同文書院學生調査大旅行指導室